

～輝きの子育て～

脳の発育と子育て

前回、5月号でスマホの脳の影響と成績の伸びる使い方について書きました。学習意欲を高めるには、「朝ごはんを家族と一緒に食べること」とスマホは「勉強する時と寝る時は電源を切る」習慣を付けることでした。「がまんできない」子どもが増えているので効果があるとの事でした。

脳の研究は著しく進んでいます。MRI装置の進歩が脳科学にも適用され「脳の謎」が解明されつつあります。「褒めて育てるか、叱って育てるか」という問題を脳研究の成果から、東大先端科学技術センターの小泉 英明 先生は次のように語っています。

褒めて育てたグループとそうでないグループでは生後18週、30週、42週のデータで社会能力（共感性、意欲、行動力など）の指標に10%以上の差が生じ、乳幼児期には褒めて育てる方が社会性が促されることが明らかになりました。叱ることは、マイナスに働くということです。生後、約2年間は脳の一番基礎的な神経回路が作られ、そこで築かれた土台は、生涯、変わらないことが分っています。満2歳までの乳幼児期には、出来るだけ養育者が愛着をもって接する。泣いても叱らず「ありのまま」を受け入れ、何か出来るようになったら、心から褒め、日頃から、赤ちゃんの目を見つめながら、言葉をかけたりスキンシップを取ったりすることが脳の発達に非常に重要です。

嫉は次の発達段階で初めて必要になってきます。時期によって対応が違って来ます。乳幼児期を過ぎれば、褒めるだけではかえって甘やかすことになります。

AIの発達によって、人間の「知、情、意」のうち「知」については十分に得られます。「意」についてもAIの力が大きな効果を表し始めています。「情」の部分については、今のところAIでは無理です。そこで、子どもを育てる上で「自然と触れる、スポーツをする、芸術を学び実践する」ことが大切になってくると思います。自然に触れること、すなわち海や山、公園、昆虫採集、飼育等を通じて、本物に触れることが身につきます。バーチャルなネット空間で過ごすより、「本物」に触れる生き方が大切だと思います。

次いで、芸術教育（絵画、音楽）やスポーツの実践が大切です。自然体験、芸術、スポーツを通じて、心に感動を育み、人間にとって最も大切な「思いやり」や「情熱」を身につけさせることが必要だと考えます。私は、脳科学について、本によって知識を得ています。その中で、最近、面白かった本を紹介します。

「子どもの脳は8タイプ」SB Creative 脳内科医 医学博士 加藤 俊徳 著

内容は1万人の脳をMRI画像で研究した結果です。子どもの脳には8つのタイプがあり、そのタイプ毎に子どもに接する仕方が異なると言っています。

- 1 リーダータイプ 周りに目配り出来、人を引き付ける力を持つ
- 2 論理タイプ 記憶力がよく、理詰めで考える
- 3 クリエイティブタイプ . . . 好奇心がつよく、何かを好きになる力が高い
- 4 癒しタイプ 周囲の状況、人に対する感受性が強い
- 5 バランスタイプ 脳の変化の振り幅が一番大きい
- 6 フレンドリータイプ 天然のポジティブ思考と協調性で友達が多い
- 7 多動タイプ 経験値が溜まりやすく、物事を極めやすい
- 8 エキスパートタイプ 特定のことに對する好奇心が強い

因みに、お母さん先生は、リーダータイプ、フレンドリータイプでした。

今からどのように育てるかには遅すぎますが・・・。

この本の「脳 特性診断テスト」によってタイプが判明しますが、これは肝（ノウハウ）ですので記することはやめました。

片野 英司